

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月12日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04057

研究課題名（和文）スクール・エンゲージメント促進のための動機づけ介入研究

研究課題名（英文）Motivational interventions for school engagement

研究代表者

中谷 素之（Nakaya, Motoyuki）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：60303575

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：ライティングの動機づけ支援によって、作文の内容量のみならず質的な向上もみられ、言語活動充実のための動機づけ支援と学習方略支援への実践的示唆が得られた。

第一の成果は学術的貢献であり、学会での発表や学術論文などの学術成果を通して、ライティングへの動機づけ支援の重要性を示した。第二の成果は実践的貢献であり、講演や校内研究での指導などの機会を通して、動機づけ支援によるスクール・エンゲージメントの促進に関する実践的示唆を教育関係者に発信するものであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

いかに児童のライティングを改善するかについては、これまで、作文の構造を教えるなどの学習方略研究を中心に研究が進められてきた。しかしそこでは、“なぜ書くか、何のために書くのか”といった児童の動機づけ的側面への注目が不十分であったという問題がある。

本研究では、方略支援だけでなく、その理由や志向性に関わる動機づけ支援を行うことにより、ライティングの質と量が向上する可能性を示すものであった。このことは、学習方略研究と学習動機づけ研究とを橋渡しするものであること、また、実際の教育場面でいかにスキルと動機づけを支援するかを考える重要な示唆となること、という意義があった。

研究成果の概要（英文）：As a result of motivational intervention for writing the amount of contents as well as the qualities of compositions had improved. The result implied that how teachers and educators should support writing skills and motivation for writing in classroom.

The first outcome is an academic contribution. The importance of motivational support in writing was demonstrated through academic presentations and articles. The second outcome is a practical contribution. Through educational lectures and instruction for in-school research, we conveyed the significance of promoting school engagement with motivational support to educators and practitioners.

研究分野：教育心理学

キーワード：スクール・エンゲージメント 学習動機づけ ライティング 児童

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

わが国の児童・生徒の学力に関して、近年の全国学力テスト(全国学力・学習状況調査)の結果などから、学力の下げ止まりや学力格差の是正が見られ(国立教育政策研究所, 2013)、学力低下問題については一定の解決が見られたといった評価が多い(例えば、朝日新聞社, 2013)。しかしこれらの評価では、これらの学力テストの「結果」、すなわち得点や順位が主に扱われており、学力の背後にある意欲、すなわち「動機づけ」の問題については十分に議論されていないという問題がある(例えば市川, 2001 など)。実際に、例えば 2013 年の学習到達度調査(PISA)の結果でも、数学への興味や道具的動機づけは、OECD加盟国 65 国の中でもっとも低く、2003 年の調査時と同様に最低の水準であり、わが国の児童・生徒の動機づけの低さは、今日も大きな教育課題であり続けている。

このようななか、教育心理学領域で最近注目されるエンゲージメント研究(Engagement Research)は、従来の適応概念を一步進め、より積極的・能動的な活動への関与を意味している。従来の多くの研究のように動機づけが学業成果に及ぼす影響にとどまらず、対人関係や社会的側面への包括的で主体的な参与に対する影響を検討することは、上記のようなわが国の児童生徒の学力および動機づけの課題を明らかにし、どのように動機づけを支援すればよいかについて新たな示唆となると考えられる。

2. 研究の目的

わが国の教育課程における重要な課題である、言語能力の充実、特にライティングの促進について注目する。その理由は、第一に、これまでその重要性が指摘されながら、十分には検討されてこなかった、児童の学習における学習方略の教授と動機づけ的な支援との両面にあわせて介入し、その効果を検証することにある。これにより、方略教授と動機づけ支援という多側面からなる学習支援の知見を得ることが可能になる。第二に、わが国の教育心理学領域においてほとんど行われていない、文章産出に関する学習方略および動機づけ支援の効果について検討し、自己調整学習研究の文脈において、どのような方略教授や動機づけ支援がよい文章生成のために重要であるかについて、実証的に明らかにすることにある。スクール・エンゲージメントについて、作文および国語への主体的取り組みを中心に評価、検討する。

3. 研究の方法

方法 研究参加者 A 県内の公立小学校 1 校の 6 年生 4 クラスの児童 132 名。

研究方法

実践内容 授業内容については、協力校の教務主任および学年主任を対象とした聞き取りによって、例年の同単元の授業実践について情報収集を行った。それをもとに、方略支援と動機づけ支援という介入の視点を踏まえて修正を加えながら作成した。

1. 単元 6 年生 国語

2. 内容 「自身の体験(修学旅行)をどのように振り返り、下級生に伝えるための文章として構成するか」という点を重視した、作文の内容として構成した。

群設定

(1) 方略教授・動機づけ支援群: 文章作成のスキルや方略への介入を行うとともに、その際の課題への取り組みに対して課題を価値づけ、興味を喚起する働きかけを行う

(2) 方略教授群: 文章作成のスキルや方略への介入のみを行うもの。特に学習活動への価値づけなど、動機づけ面への働きかけは行わない。

測定尺度

指導計画の 1 時間目(プレ)、4 時間目、6 時間目(ポスト)に以下の尺度を実施

(1) 作文への興味(6 項目・6 件法): 個人的興味と状況的興味の各 3 項目から構成される。項目は Harackiewicz, Durik, Barron, & Linnenbrink-Garcia (2008) で用いられた興味の項目を参考に作成し、「作文」についての面白さや個人的な重要性を尋ねたもの。

(2) 作文へのエンゲージメント(3 項目・6 件法): 作文に関する主体的な取り組み(エンゲージメント)について、Skinner et al(2009)および梅本・田中(2012)によるエンゲージメントを測定する項目を参考に作成した。

(3) 作文についての評価 作文の分量(文字量)および作文の質(構成)について、教員経験 10 年以上の教師 2 名により評価された。

4. 研究成果

その結果、作文の方略のみを教授する群に比べて、方略とその動機づけを支援する介入群では、有意な作文の量および質の向上が見られた。そして、作文授業へのエンゲージメントと国語への主体的エンゲージメントの事後の各指標について有意な正の影響がみられ、方略および動機づけ支援群においてより高い効果が認められた。さらにその結果は、児童の状況的および個人的興味の程度を統制した共分散分析の結果においても示された。

これらのことから、方略だけでなく動機づけ支援を行うことが、ライティングの質と量を高め、エンゲージメントに積極的な影響を及ぼすことが示された。すなわち、ライティングの教授の際に、「なぜそれを書くのか」という動機づけにも注目した指導、支援によって、児童の主体的・能動的な取り組みが促されるという、有意な成果を示すものであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 中谷素之 2019 人間関係と動機づけはどうつながるか 初年次教育学会誌, 11 巻, 印刷中 [査読無]
2. 中谷素之・田中 あゆみ・伊藤 崇達・外山 美樹・大坊 郁夫・鹿毛 雅治 2018 学習動機づけ研究の未来 教育心理学研究における動向とこれから 教育心理学年報, 57 巻, pp. 250-257. [査読無]
3. 解良優基・中谷素之・梅本貴豊・中西満悠・柳澤香那子 2017 利用価値介入が大学生の課題価値の認知に及ぼす影響 日本教育工学雑誌, 40 巻, pp. 57-60.
DOI: <https://doi.org/10.15077/jjet.S40040> [査読有]
4. 遠藤志乃・中谷素之 2017 中学生における動機づけ調整方略と達成目標および学習習慣との関連 心理学研究, 88 巻, pp. 170-176.
DOI: <https://doi.org/10.4992/jjpsy.88.15328> [査読有]
5. 解良優基・中谷素之 2016 ポジティブな課題価値とコストが学習行動に及ぼす影響: 交互作用効果に着目して 教育心理学研究, 64 巻, pp. 285-295.
DOI: <https://doi.org/10.5926/jjep.64.285> [査読有]

〔学会発表〕(計 7 件)

<国際学会>

1. Motoyuki Nakaya 2018 Write for What? Motivational interventions for writing strategies in Japanese elementary classrooms. 29th International Congress of Applied Psychology. Montreal, CA. [査読有]
2. Motoyuki Nakaya 2017 Does The Japanese Student's Motivation Matter? From a Educational Psychology Perspective. Secondary Education and Youth Service Symposium, The City University of New York, Queens College. New York, US.
3. Masaki Kera & Motoyuki Nakaya 2015 Interactive effects of utility value and cost on students' engagement. the 14th European Congress of Psychology. Paris, FR. [査読有]

<国内学会>

4. 涌井恵・田中博司・畑中由美子・奈須正裕・中谷素之 2018 自己調整学習者を育てる実践と研究の往還への挑戦 日本教育心理学会第 60 回総会自主シンポジウム
5. 犬塚美輪・島田英昭・深谷達史・小野田亮介・中谷素之 2018 論理的文章の読み書きの力を育成する 日本教育心理学会第 60 回総会自主シンポジウム
6. 中谷素之・篠ヶ谷圭太・伊藤崇達・瀬尾美紀子・Hefer Bembenutty・秋場大輔 2017 わが国における自己調整学習の展開と未来 日本教育心理学会第 59 回総会自主シンポジウム
7. 町岳・中谷素之・橘春菜 2017 達成目標促進と授業実践型相互教授の効果(4) 日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集, p.614

〔図書〕(計 4 件)

1. 中谷素之 2018 これからの時代に子どもに求められる学びの力とは 児童心理 72 巻 8 号, pp. 769-778.
2. 中谷素之 2018 学級で生活する・学ぶ 指導と評価 2018 年 3 月号 pp. 6-9.
3. 中谷素之 2017 負けず嫌いとう上心 児童心理 71 巻 4 号, pp. 282-288.
4. 岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一 2016 自ら学び考える子どもを育てる教育の方

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教育心理学研究室
中谷素之研究室

URL <https://www.nakaya-lab.com/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。